

太宰治と私

木立 民五郎

長い才月の中で、土に埋れ消え去って行くもの、或る時は華々しく人の記憶にあったが、いつしか忘れ去って行くもの、千差万別の事跡が水の流れて似た、歴史の彼方に消えて語ることもなく、思い出すこともなく、今ある姿が当然のように生きている町、そして部落が息ついている。「嘉瀬十年」と云れた部落の中に生れた『かたりべ』の役割は悠久の渦の中で、果して何を語らんとしたか、人丸の石に深いメスを入れ奴踊りの歌詞に出てくる「石コ流れて木葉が沈む」封建の昔に挑む、土着人のレジスタンス文化の血は、歌に、俳句に、そして民謡元祖のモモを生み、作家太宰治と綴方の土岐兼房、若手人気の『吉幾三』、数へたら多くさんの文化人を輩出している。すぐれた土壌が今日の風調となつてい

る。

作家太宰治は、生前よく私達に、嘉瀬は私の祖父の生れた土地、私の故郷は嘉瀬である。戦時中の疎開の時代に一寸の合間に、出来上った原稿を撰に観音山の御堂に、或は小学校の教室に、若い文学愛好者を集めては朗読乍ら自作の解説をした。

『かたりべ』の第二集に是非この日本の作家が、津軽鉄道の寒駅に降り、テクテクと山を登り、或は古びた小学校の教室で、語り聞かせた思

い出を、又偉大な作家の足跡を書き綴って、嘉瀬部落がかもし出している、文学的雰囲気、後に続く若い人達に伝えることも、私達ふるさとを、ここに発表することにする。

太宰研究で有名な弘高の相馬正一が

『太宰に選挙演説の話はきいたことがあるが、今日はじめてその真相にふれ、大演説であることがわかりました』と云われた。その演説の草稿を、ここに発表することにする。

太宰との出会い

昭和二十年、津島修治は、生れ故郷の金木町へ疎開して来ていた。兄文治、即ち山源の生家である。

金木町も爆撃を受け、神社の大きな石鳥居が飛んだり、少しくの死

兄文治が何か話が、これからどうなるかという問題になると離れて居る、弟太宰治を呼んだ。

太宰は二階の文治先生の居間に来ると、きまって部屋の隅にチョコンと静坐して兄の言葉を待った。

文治先生は、今ここに居る若い人達と話合っていたんだが、敗れた国の男の生き方について訊ねた。サア、一寸見当が付きません。太宰は決ってこの返事だった。

私達若い仲間の空気にひたることもなく二十分もすると、兄文治の部屋から逃げるように出て行った。そんな太宰とちかちか話合ひきつかけは、昭和二十年の十月頃だった。

兄文治が不在の日、隣り町の地主、山源へ農道改修で交渉に行った時、支配人の野呂儀兵衛さんが、修治さんが居るので話して見たらということになり、離れ座敷に居た太宰のところに案内した。

清酒一本持参して行った。嘉瀬村の福岡助役と二人、太宰の部屋で対座したが、太宰はそんな話は全く無関係で、返事にも相談にも乗れないというのが回答だった。

結局持参の一瓶瓶については飲みましようということになって、三人は、太宰が押入れから出した、弘前藤田酒屋から寄贈されたウイスキー一本を入れて、日が暮れるまで、三人飲みになった。

酒が口に入ると、太宰は急に饒舌になった。もう山源のオンチャマでなくなり、天下の作家になり、青中先輩の津島修治になっていた。強か酔が廻り、福岡助役に抱えられて山源の家を出た時は、日はとっぷり暮れていた。

傷者も出た為、修治こと太宰治もリヤカーに荷物を積んで逃げ出したこともあった。

戦争が終って東京三鷹に帰るまで、山源の離れに一家が住んでいた。太宰はカスリ着物の着流しで、その頃文治先生に出入りしていた私は、

太宰とマムシ

その日から、私は文治先生より、太宰を訊ねることが多くなり、太宰も午後になると電話で私を誘った。

濁酒を持参すると、これが津島文化酒と喜び、或る時は、マムシを焼いて持って行くと、食べ方をきいて、三センチ以上食べると鼻血が出るときいたが、あんまりおいしいので、つい八センチも食べてしまった、と、頭をかいた情景が昨日のように浮ぶ。

太宰の祖母が亡くなって、当時田舎の大家は、すぐ葬式をしないで二ヶ月も喪に服すのが慣しだった。勿論山源も、祖母の死から家族は喪に服していた。

この頃太宰は、或る日電話で、今日の二時頃、嘉瀬駅に着くから、駅のホームで待っていてもらいたいと連絡があった。私のりんご畑に行きたいという意向である。私はりんご畑で働いている若い者に、葺と鶏の準備をさせていた。

例によって、カスリの着物で、太宰は嘉瀬駅に降りた。二人は線路伝いにりんご畑に向って歩いた。

途中太宰は、三十日近くも魚なしの精進料理では参ってしまったとこぼしていた。私は、今日は一つ大いに馬力をつけてやるからと話して、二人はりんご畑の小屋に辿りついた。

早速鶏鍋がかけられ、松林から、とりたての茸を籠一ぱいあって、太宰はやっと生がへったと云って、このことは決して他言しないことと念を押した。喪中鶏鍋をつつくなど矢張り気がとがめての言葉だったかも知らない。

何を話したか、兎角酒が大分廻って、太宰は『唐人お吉』の唄をうなって、私にも何度も合唱をうながした事だけはハッキリしている。暗くなってから、りんご畑を出て、二人は金木に向って歩いた。

嘉瀬と太宰

タクシーのない終戦の年である。太宰はよく『私の先祖は嘉瀬なんだ、私には嘉瀬の血が流れている』と云った。

事実津島の家には、嘉瀬の山中家から惣助という先々代が行って、山源の家を盛り立てた記録はある。

従って、太宰は疎開中に書いた『春の枯葉』『冬の花火』等作品が完成し、原稿を東京に送るまえに、嘉瀬の小学校の教室に、十四・五人、私のグループを集めては朗読して解説したり、或る時は、観音山のお堂で、同じことを繰返した。

かげり一つない。明るい表情で、齡下の若い文学愛好者達を楽しませた。この点で、嘉瀬の若い人達は、誰よりも恵まれた時代を経験したと云ってもいい。

太宰と選挙演説

昭和二十一年に入って、兄の文治先生が衆議院の選挙に出馬することとなった。運動員はそれぞれの役割が与えられ、側近の私達に忙しい毎日が続いた。或る日太宰が、そっと私を呼んで、

『私も兄の応援をやって見たい』と云った。

『どんな方法ですか』と私は聞いた。

『演説をやる』私はびっくりした。

ことならと考えて出向いたのが、この会場です。

迷惑ばかりかけて生きて来た弟が、兄のため一席弁じ、明日の日本のため働く国会議員に一票という大それた気持でなく、哀れな弟の心情をくんでくれる若い人達に、いつかは、誰でも迎える、兄弟の道が、未来永劫かけて、太い絆となって織りなすものだと言ったのでした。

兄も、そして兄の周囲も、愚弟の私に何も求めていない。今私が住んでいる離れの部屋で、コツコツと作品を書いていることを欲しているでせう。

しかし私は、原稿用紙に向っている以上に、今の私にもっとも貴重な時間は、無駄かも知れない皆さんと相対して、不敏な人間の兄を、恩を、心から吐露することだと思っている。

祖父が出た地に先づ第一号を踏み、同じ血の匂がするお集りの皆さんと会って、温い手を指しのべてくれた、長兄文治のために、皆さん方に、強い御支援をお願いすることは、選挙というものを全然知らない作家太宰治の非常識な言葉でせうか。』

ザッと斯んな弁舌が終って、後は参集者と対談の時間をもった。

『冬の花火』に出て来る深い言葉が出て、これから生きる日本の若い人達の行手について語り、世相の見透しについては、『春の枯葉』から滲む美しい言葉がふんだんに流れた。

演説会が終って、会場から出た時は、夜の十時過ぎであったと思う満天の星が輝いて、月のない夜だった。

あれで選挙演説になったろうかと太宰はそばに寄ってきて言

酒の上では、随分口達者な太宰であるが、選挙演説となると、どんなものかなアと思った。

相談した時は、もう心に決心して、やることは決定的である。

手始めは西郡木造町からということになって、父貴族院議員の源左エ門は木造町の泰封家松本の関係もあったものから本造町を撰んだ。

三十人も集ったろうか、若い人ばかりで、選挙演説をきくというより、作家太宰治の講演会をきく雰囲気だった。

演説会は、全くの前座もなく、時間が来ると太宰は、さっと壇上に上って、静かな口調で話し始めた。チラッと一・二回私の方に視線をくれた。

『長い間、私は同族の人達、とりわけ長兄文治には親以上の厄介な問題を持ち込み、ついに津島家から、かん当の宣言まで受けた身である。併し私は、当然以上の当然と悟っている。』

その私を、一旦東京地方が戦場にさらされると、金木町に温く迎ってくれたのが長兄文治である。ふるさとの風は和み、私は今、安住の地で静かに筆をとれるのも兄達の温情の賜である。

その兄が、今回衆議員の選挙に出馬し、皆さんの一票をお願いしている。私は政治に於ける選挙が、基礎であることをよく承知してない。選挙とは、どうすればよいのかも知らない。

併し、長兄をとり巻く、多くの同志が顔を引きつらせて走り廻っているのを見てみると、男の大事な仕事だなアということは、ひしひしと胸に伝わる。

出来ない乍らも、何かして長兄文治のために、私の頭を下げて済む

った。私は文章でない太宰の言葉に大きな感動を受けた若い人達の顔を思い浮べた。

『大変よかったです』と短く答えて、

『明日も、明後日も続けて下さい』と如何にも文治先生の参謀らしく云った。私は作家太宰治の選挙演説にまだ酔っていたのである。

政談の一言も出ない選挙演説、太宰治の演説はたった一回きりで、その後数回西郡を廻ったことはきいたが、私は木造町の夜が、最初であり最後であった。

会員募集

昭和52年私達嘉瀬を愛する同志が集い。嘉瀬ふるさとを探る会を組織してから、私達の会は、金木町の文化活動団体のなかでも、最っとも活動する行動する文化団体に発展してきました。私達会員の主とする目的は、ふるさとの遺蹟・文化芸能を掘り起して、これを調査記録しながら、私達祖先の遺産を、これから嘉瀬を育て受け継ぐであろう、次の世代の嘉瀬人に残すためです。

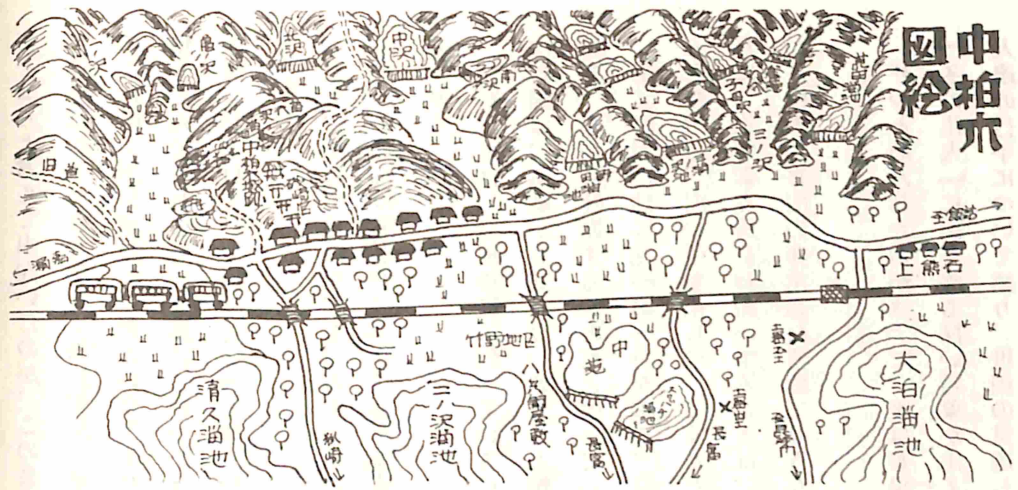
嘉瀬地区に在住する三十才代から四十才代の郷土を愛す、ふるさとを探る熱意のある、永続性がある、会の目的に賛同する方は誰でも入会できます。あなたの個人的な研究心を会の中で発揮してみませんか、それを会では、あなた方に求めています。

入会希望の方は会長に連絡して下さい。(会長木村治利)

中柏木断片

原田万治

中柏木
断片



はじめに

中柏木部落は古い歴史のある村である。歴史はあるが、これといった古跡の証拠のないことも事実である。遠い古代はいざ知らず、中世に於てすら、残された遺跡は全く見当らない。あるのは先住民族が使用したのである。土器と、言い伝えがあるに過ぎない。一つ一つの断片を撃ぎ合せて、一筋の物語りにまとめてみたいと思う。

今様の言葉で言えば、開発されない昔の中柏木は、数多くの土器の出土する場所であった。大きく分けて、八兵衛屋敷を中心に、北西に竹野地区、南に三の沢地区と三ヶ所に集まり、また部落の東側にも散在している。この三ヶ所は、中心の八兵衛屋敷から、それぞれ直線で五百m内外に位置し、互にそれらの集落を形づくっていたのだろう。おもしろいことには、この三ヶ所とも水辺に近く、労することなく自然の水を利用したであろうことがうかがわれる。それは今から約五千年前には十三湖につながり水位が五米から六米も上っていたと云われていることからして、そうすると当然この三ヶ所も、一大湖面の一翼にあたり、浅水ながら湖の岸辺と云う地形をなしていたと思われる。

金木町には相野山遺跡や、妻の神遺跡。昭和五十三年には青森県教育庁文化部による神明町遺跡発掘というすばらしい遺構と遺物が発掘されておりますが、中柏木地区に於ては、数多くの遺跡の埋蔵をみながら、何ら系統的に学術的研究がなされぬまま、耕地に変容してしまっただけで残念でならない。県の埋蔵文化財の指定をうけている場所もあるが、既に開発された後では、何んの意味もないだろう。

土器埋蔵の三ヶ所のうちで、一番規模の大きいのは、やはり八兵衛屋敷で、まだ原野であった頃は、現在の津軽鉄道の西側から二ノ沢溜池の崎まで、約十町歩の範囲にわたって、土師器や須恵器を使用した生活の集落のあとがみられる。縄文から平安時代後期まで、先住民が生活の居を構えたことは、

埋蔵土器から、うかがいしることが出来る。

平安時代後期までと区切ることは、いささか冒険じみた結論になりますが、その目安となるのは、文字の入った土器のかけらからの推論にすぎない。文献によれば南北朝時代の康永年間に、今の中柏木の村落が形づくられたと伝えられているが、浪岡、飯詰、中柏木、忌良市と山麓の村であり、道路を通して一本の線につながり、当然嘉瀬の村よりは地形的にみて早く開村されたに違いないであろう。人の知恵は、井戸を掘る技術の習得によって、必ずしも水辺でなくとも生活を容易にしたであろうし、稲作を中心とした農耕が伝播されると同時に、冬期における寒さからの逃避も考えられ、今までと違った場所に、生活の場を創ったのだろう。水辺においては、どの地区も冬期間は、北西の冷風をもろに受け、暮しにくい苦痛が、身を呈してわかってきた。

現在の部落の、でき始めは勿論、安東一族の支配を受けた地域で、陸路における交通の要衝に中柏木は位置し、藩政時代に築きあげた二間道路でなく、駄付馬が通れる程度の道巾で往古の住民は往来したであろうことは、近年まで、その道筋が残ってあったことから察知し得たことだろうか。え知ることが出来る。

八兵衛屋敷

私達昭和一ケタと二ケタの時代に、嘉瀬小学校に籍をおいていた方々は、遠足になれば必ずといってよいほど、八兵衛屋敷へ、先生に引率されて、自然の原野に足を踏み入れ、一日いっぱい走りまわった記憶に懐しい思い出にかられる方々が多いと思う。

その八兵衛屋敷を一名ガンド屋敷ともいう。ガンドという言葉は、今のことも違は使用しない方言だが、私共小さい頃は、たびたび使ったものである。その意味は、通せんぼのことであるが、ガンド屋敷の

ガンドとは「法度、縄張り」と。普通の人が近づくとできない恐れい存在の場所で、泥棒、追い剥きの巣窟の溜り場であったと、年寄り古老から、その話を聞かされた私の小さい頃は、夕暮れ時になると、ガンドが出るといわれ、八兵衛屋敷に遊びに行っても、早々に明るいうちに帰ったものである。

伝説につつまれた八兵衛屋敷の八兵衛という人物と、ガンドのつながりは、あるのか、ないのか、さだかでないが、安東一族支配の律令社会が浸透してくると同時に、組み込まれたか、いづれにしても、あまりにも強烈な印象を中柏木部落に与え続け、何百年と語り継がれてきた根柢は、何んであったろうか？

▲中柏木墓地



▲中柏木磯崎宮



また、八兵衛なる集落の頭目が跳梁した時期、安東支配が確立する前、道路が現在の中柏木の山と官有林の山境、大峯筋を主として通行した古代のことであれば、距離からして可能ならしめ、集落自体が、金品を掠奪して、なりわいを維持したであろうと思われる、その頭目は津軽古代人ツボケ族でなかったらうか。従って後年八兵衛屋敷にかかわる代表的な伝説（昭和五六年六月一日発行、ふるさとのかたりべ第一集五六頁掲載）が伝わり、白百合、若者、旅の僧、村人、財宝と想像をたくましくした、日常生活の夢物語りとして、伝説が生れる素地が中柏木部落に生れ育ったことは、中柏木部落は日本の神話を例にとるまでもなく、津軽郡中でも古い部落の集落であったということが定義付けられる。

村の名と城、神社

安倍貞季が正和年中（西暦一三二二年ノ十六年）に作成した古地図に始めて中柏木の名称が記録され、集落として中柏木が出てくる。当時必らずといってよいほどやってくる凶作と、飢饉に、山麓の村も翻弄され、急速に大きく集落が発展することは、自然が許るさなかつた。ほそぼそと、長い年代に生きづき、生きのびてきた中柏木。

中柏木という村の由来は、読んで字の如く、柏の木の群生する地帯（植物学上では柏の木は古生木という）であるから、始めは柏木という村称であったかも知れない、これは私の推論にすぎないが、柏木と名のつく村落は当時三つあって、その中心に位置するから中柏木であ

てしまい、当時の姿をかい間見ることができない。

津軽藩発祥の地種里城、飯詰の高樞城、嘉瀬城、中柏木城と比較してみても実に天然の地の利を得た場所に築城の居を構えている。中柏木の城から北へ、山の稜線を越えれば嘉瀬城で、共に下の切道路沿いに築城され、連絡を取り合った兄弟城で、安東一族の支城をなしている、村の若人が即戦士となり、事態が急を告げる時は、城郭の中に婦女子、子供、老人を囲い、むらおき村長の指揮に従い、戦夫が村人の生命を守る皆が、中柏木城であった。

もしも、あの乱世の戦国時代に、中柏木に農耕から解放された、権力支配者、あるいは富める階層の人物が村に居たのなら、何んらかの形で後世に残された遺物遺品が村に存在しているはずであるが、またあったとしても、津軽為信に完膚なきまでに叩き毀されたのか、為信は安東の影すら忌み嫌った偏執者であったから。

中柏木の産土神は磯崎神社であるが、磯崎とは磯と崎にある海を連想されるのが当り前であるが、必ずしも塩からい海辺でなくても、海に連なる水辺でも海神、水神につながる。中柏木の場合は、十三湖につながる水辺に建立したのが中柏木城跡の中に磯崎神社が、中柏木の守り神として鎮座していた。

中柏木城は、応永二十六年（西暦一四一九年）南部守行による攻撃に合って廃城となったが、神社跡には薬師様を長らく祀ったと伝えられてきた。

現在の場所にある産土神は、勧請年月不詳と請書に記るされ明らかでないが、拝道登り口の手植の老杉、森の老松から年輪を逆算してみても二百五十年前頃に植えたみると、つまり享保の世代に現在位置にあ

ったろう。それは旧喜良市村に柏木という地区名があるし、もう一つは中柏木の南方、つまり飯詰と中柏木の中間に柏木という名の集落が存在しなければならぬが、何んかの變動で廃村の憂目うれしめに合ったのか。ましてや、村の名称は、戸数の比ではなく、数戸の戸数が寄り集っておればむらと呼ばれて来たことは、明治の始めに編集された。新撰陸奥国地誌をみてもわかるとおり歴然としている。

村が起ると、家ばかりでなく、村落の和と信仰を托した祭祀の場所が必要になってくる。古代においては、祭祀と政治が一致し、区別のつかない連携の姿をとっていたと云い、開村から中世の中柏木においても、その傾向が強く、神社は政治と一体をなしていたと考えられる。

もちろん神社の安置された場所は現在の場所ではなく、中柏木城跡の小高い頂上にあった。神仏混濁時代のこと、神社と寺という二つの性格をになった一つの建物であったらう。中柏木の城は山城で、常駐の武士がたむろした城ではなく、普段は単なる神社の森にみえるが、一旦事が起ると、攻守をかね備えた城塞の砦で、村人が戦士となり、戦いの弓矢を放ったのである。古記録上には城主不明とあるが、あいて城主を捜せば、むらおき村長の政治の長であり、事ある時は城主の地位に当たったのである。昨年昭和五十六年にふるさとを探る会の探査によって、城跡の場所と規模を確認。調査の段階では、実に天然の地形をうまく利用した山城で、今の県道から眺めれば、何んの変哲もない森に見えるが、一步森の中に入ってみると、守りに適した地形に着眼したものであると感心させられるものがある。手を加えているのは、ほんの少し南側に空堀を擁した形に過ぎないが、今は小さな空堀も埋も

る磯崎神社が建立したとみて差し支えないと思う。

明治年代までの間に記録に現われたなかで、享保年代は一番戸数、人口とも繁栄をなした時代で、境内地のなかの整地等を考えると、三人では整地できるものではなく延べ人員一〇〇人は要したとみられるからである。磯崎神社は茅葺の建物で、中は暗く、明り取りは葎を利用したのだが、大正二年に惜しいことに全焼、御本尊も焼失し、現在の御神体は黒石方面から買い取り、現在の神社を新築して祀った。

明治から

大浦為信が津軽を統一してから、文献にでてくる中柏木の模様は、「かたりべ第一集」に掲載しているので、明治からの物語りを記していきたい。

明治に入って今の私に関心のある資料はなんといっても、明治五年につくられたじんしんこせき壬申戸籍と、明治九年に編まれた青森県全域の地誌新撰陸奥国誌で、壬申戸籍は町村合併前か後に、法務局に提出され、永久に閲覧される機会が失われたが、その後の戸籍でも、昭和五十一年の戸籍改正で、他人の戸籍の閲覧は固く禁じられたことは、村のかたりべを調査する私にとっては甚だ残念である。

戸籍の改正は、始めの壬申戸籍、明治十九年式、明治三十一年式、大正四年式（この時平民士族の差別が撤廃された）。昭和二十二年、昭和五十一年と五度も改正されている。

新撰陸奥国誌が明治九年、岸俊武編するものだが、その準備期間と

して少なくとも一二年差し引いた年代とみても間違いない。地誌によれば、関係地域として、嘉瀬村家数二四六軒、中柏木村家数十軒。狐崎村家数五軒と記るされ、当時は狐崎も一つの村の単位として記録されているのが、何かしら奇異な感を受けないでもない。それは中柏木鎧石といわれる番地に存在している村なので、今の古老達の話でも、当然中柏木村の範囲に入るものと信じてきたがためである。

明治当初の十軒の戸主

さて、中柏木村は明治七八年十軒の戸籍をもって構成されていたわけだが、この戸主を次にあげることができる。A()は現戸主V。原田助五郎(僚)。原田助四郎(後に先代の名を襲名して善太郎善六)。原田勇次郎(魁)。原田勘五郎(勘之助)。成田万十郎(好隆)。成田要助(富雄)。成田惣助(俊雄)。成田勇次郎(勇蔵)。杉山藤蔵(悦子)。木村与一郎(幸男)の十戸で、明治十年に原田助三郎(正信)が一戸を構え、成田勇次郎宅より南は畑と原野で、家はなかったという。

こうしてみれば、部落の戸数は、下(北)に片寄り、産土神を中心とした線で結ばれ、一ノ沢、二ノ沢の水田が早くから耕作されたこととよ。水田耕作は一番に水があることと、近いということが良田の必須条件で、中柏木の場合は、当時誰が一の沢、二の沢を耕作したかによって、自じと遠い祖先からの家系由来がわかる。

土地の粉争(一)

明治十年に原田助五郎が中柏木村と郡役所に、それぞれ一通宛提出した土地の借用証をみれば、当時の人としては、達筆とは云えない。合併すると同時に、あるいはその直前、部落と部落の境界を策定する事情が発生してきた。中柏木鎧石と長富鎧石との境界の線引で、山林の所有権利をめぐる問題が表面化、下所としての長富部落としては、どうしても山林がほしいのである。

当時の生活にかくこのできない薪炭材があると、無いのでは、天と地ほどの違いがあるわけで、長富部落としては、是が非でも山林を確得に向く。長富部落が、三ノ沢溜池の北西、百米以内に(蟻野という)複数の長富部落民が居を構え、三ノ沢、野田の山を利用してきたから、当然三ノ沢、野田の山は長富の所有に帰すると主張。中柏木側は、原田助五郎が郡役所を通して借用管理している山根道路の東側等から実証があり、話しにならないとつばね。ここに至って一触即発の険悪な状態に落ち、明治二十二年旧暦四月、長富部落民二十数名が、其田、高橋二名の代表に引率されて、三の沢山林入口にあたる野田地区に、鉈や鎌を持って集結、かたや中柏木代表の原田恒五郎一人と対決したのである。

原田恒五郎は助五郎の婿養子で、初回の県会議員を経験した有能な人物で、弁説はお手のもの、自己の管理する中柏木の土地で、中柏木代表というかたちで押し出され、交渉の任にあたった。

談合の過程は、原田恒五郎の弁舌に、長富部落民も手も足もでない有様で、残るは只一つ、数に頼る力関係だけ。

『やれ・・・ブツ殺せ』と、鎌や鉈を振り回してきたので、身の危険を感じた恒五郎は、ただひたすらに逃げ帰ろうとした。逃げる時に言い放った有名な言葉は、只一言の捨て台詞『おぼえてる』に、おこった長富側、逃げた方向に対して、ぐるりと囲み、まわりか

が、内容は名文で、今の人では真似のできないほどの中味をもっている文章で、ある事情で全文を掲載できないが、その要旨は、打ち続く凶作に村民も痛手を受け、このままでは、今後何時襲ってくるかわからない不時の凶作に備えて、十町歩の原野を借用開拓し、粟、くるみ等を植えて、凶作の時には、これらの収穫を放出して、村民の窮状を救うとある。これが後の長富部落との土地(山林)の粉争に大きな役割りを果たす証書となった。

当時の土地には、中柏木鎧石とか、長富鎧石とかの大番地はあっても、個々の筆数に合せた地番はなかった。借用申し出た土地は、現在の三ノ沢溜池北側から一里塚の山の間で、当時の十町歩は実質的には二十町歩位に必適する面積で、かなりの広範囲にわたっていた。

これが昭和の代に入ってからも部落のなかでの粉争の種に発展するのだが、原田助五郎がこの土地を借用し、証書にしたためた内容とはうらはらに、一本の粟も、くるみも植付しなかったのは、三つの理由が考えられる。

イ、自己の蓄財を目的とした。

ロ、他部落からの侵入を阻止する為

ハ、イ、ロを合せた考え。

と結果的には、ハの項に合致し、管理権を得たわけである。

明治二十一年に、市制、町村制が公布されると同時に、中柏木村も他の四つの村と併合して、嘉瀬村となるが、土地の所有権をめぐる長富部落との間に、きな臭い空気が満ちてきたのも、この頃であった。

中柏木村も併合して間もなく、区有地の土地を、嘉瀬の山中襲助他数名の人を代表として所有名義を与え、その番地は大番地だけであっ

ら火を放った。野火は乾燥した枯野をなめつくし、延々三時間にも及び『原恒』が焼き殺されると、中柏木から多数人が救出に押し出し、恒五郎は湿地の藪に身をひそめ、やっとのことで逃げ帰ったという。

後日、長富側の関係者は放火と暴力のかどで司直の検束を受けるに至り、長富部落の人達は、其田、高橋の裏切りによって、三の沢、野田の山林を放棄せざるを得ない状態となったとの見解をとっているが、真相は決して自己の利益のためのみという簡単なものでなく、それぞれの土地の、古くからの共有権利、利用権利、部落対立関係が遠く起因するものがあつたことだけは言い切れる。

そこで、この騒動の結末は、治安の確立していない明治二十年代に於ても、集団暴力は暴動の決起とされ、完全に中柏木の勝利に終り、明治二十四年四月十六日、地上権の設定により不動野二十一番の一として百六十町歩という山林が中柏木部落の所有となった。

明治二十五年、個人別の分限図が作成され、官地、区有地、個人所有地別の区分が明確にされ、各個人に対して、始めて権利証が交付されたのである。

この頃の中柏木の家数は十三戸で、水源かんよう保安村の一六〇町歩、中柏木部落の区有地山林五〇町歩嘉瀬山の二〇町歩、原野約六〇町歩を有する広大な土地が中柏木の持ち物で、それと田畑を合せると、中柏木は戸数の割に比較して、近隣の村に比して、比較にならない土地を有していた部落であった。この物持になった時点から、共通の利益、配分から、好むと好まざるにかかわらず、部落共同体組織が確立され、紙の上の規約をのりこえた不文律で支配され、ここから部落固有の閉鎖性が浮きぼりにされてくるのである。

中柏木部落と長富部落の部分的な紛争がもう二つあった。

(その一)

一つは子母沢溜池の水利権がからんだ問題である。三の沢溜池の水系は、釜范溜池と、子母沢溜池、三の沢溜池と、三つの溜池から成り立っている。ついでに三の沢溜池のことについて少しふれてみると、もとは小さな溜池で、その小さな溜池を利用できるのは、いわゆる三町三反で、それより下の水田は、日照り掛りと称して、たえず水不足に悩まされ続けてきたのである。そこで長富部落の開田が進むに伴い、どうしても大きな水源の溜池が必要になってきた。

今から一五八年前の文政七年（西暦一八二四年）に其田弥太郎が二の沢溜池（長富溜池）の提防を築き、長富溜池の築堤と前後して、今の三の沢溜池も提防の笠盛りをしている。

三の沢溜池の水利権の話し合いの結果は、三町三反には一切の維持修理の負担をかけない。留板三枚に水位が下がると、三町三反掛りの自由にまかせるといふ規約が成立、現在の提防が築提された。それと同時に釜范溜池、子母沢溜池の提防が完成を見、この決めごとが十年前迄は守られていたが、中柏木側でも、長富側に同調する人と、水利における力の強弱の関係でなく、維持費の負担から、昭和五十五年小田川土地改良区に管理権が吸収された。耕作農民の手から役所の管理体制に移った溜池が今後どのように変化していくか今後の推移を見守りたい。

(その二)

子母沢溜池の子母沢は、いま根吾呂と名称が変わっているが、この山長富溜池水門まで距離が遠く、水争いが昭和の始めごろまで、いさかいが続いたそうである。

永い年月の慣習に従い、農民は耕作のため、隣り同志、近隣部落同志で、一つの水、一流れの水源に争い続けてきたのだった。それは生きるための糧を得るためにほかならなかった。

明治も終わりに

神仏混淆、自然崇拜の思潮も、明治に入ると、国の国家樹立意識思想統一化から神国論の台頭で、神と仏の分離政策がとられ、山裾の村中柏木も例外でなく、明治三十八年墓地の移転が始まった。墓地は万十郎屋敷の奥、つまり神社の境内地に向かって右裾下にあたる場所にあった。何百年と眠り続けてきた先祖の御霊の地を二百米北の、今の墓地に住みかえられた。

妖怪や、狐狸の類の出没が信じられていた時代で、移転には、いろいろな噂が立ち、一時は戦々恐々とした生活であったという。お払いや、加持祈祷が盛んに行なわれたと聞かれる。

民俗信仰の点で、小さな部落であるが、伝統的な古い部落であり、その底に流れる人の撃がりの潮流は、マキ対マキと、今では考えられない、競争心の争克に驚きを禁じ得ない。

部落の傍の東側には、三つの森がある。一番高い森は産土神の磯崎神社、次は七面大明神、甲子塔、庚申塔のある中の森で、明治二十三年に成田氏系の六人で甲子塔を建立、明治三十二年には原田氏系で、

の沢には、哀しい母と子の物語りが綴られている。この沢は、封建時代から明治の始めにかけて、貧農のため間引きされた子の捨場であった。母と子の沢というところから子母沢と云われてきている。また別名猫沢とも呼ばれている。

それが水門取替工事のとき、語呂合せか、何んの根拠もない『根吾呂』という名称にすり替えられてしまった。原因は水門取替工事の時に、任意の三の沢水利組合の実権が長富部落に握られていたことから沢の由緒ある名称が吟味されることもなく勝手に付け替えられてしまったのである。

中柏木の野田地区も、明治のなかばを過ぎてから、原野であった野原を開田し、水稻栽培に着手した。野田の水系は、大小合せて四つの溜池からなっているが、水源そのものの沢が浅く、常時出水がなく、水不足は毎年の如くで、そこで子母沢溜池は中柏木村の保安林に属する水系にあるため、子母沢溜池の利用を思いたち、水路を開き、野田地区の水田に利用しようという計画。それを実行に移したのであったが、長富側の関係者が黙っていない。所有権と水利権のぶつかり合いで、いろいろな駆引きの末、中柏木側は敗訴の苦い経験を味わった。

(その三)

もう一つは、長富の其田弥太郎が長富溜池の笠盛り築提したことに始まる。

この長富溜池の満水時には、中柏木の下田といわれる約十町歩が水没し、農作業が時期外れの為、半作以下の作柄に泣かされてきた。

当時それで、中柏木の耕作関係者は夜陰に乗じて、ひそかに水門の留板をはずし、水位を下げようと出かけたものだそうだが、何分にも

庚申塔を七人で建立。少し北に下って、庚申塔と建てられているが、一四ノ五戸よりない部落で、氏対氏の形で信仰の型態も違うことは、氏の絆が、いかに強かったかを物語っている。

七面大明神は成田永作の姉が十七才の時、病氣快癒を祈願して小さな祠を建立したのが始まりとされ、法華宗のなかに含まれているひとつの信仰形態で、大正の後半現在の建物の大きさに増築されたという。

産土神の祭礼が部落全体の祭りであるのは当然だが、七面大明神の祭礼には、授乳の霊験あらたかなるといわれ、既婚女性には重宝がられ、非常に賑わったという。

七面大明神の森も区有地で、昭和四年部落で、登記名義を原田勘助に預かってもらい、戦後境内地と参道を残して十三人に分けられたが、昭和五十三年狂信的な一部の信者が境内地を私有化しようとしたが、部落全体会議を聞き、原田勘助の好意によって、同年九月十八日、名義を五人の共有地とした。また土地は部落全体の財産として永久に保存することとなった。五人の共有者の氏名は、成田勉、成田好隆、杉山邦義、原田勝雄、原田万治となっている。

大正から昭和へ

大正時代、戸数に比して、広大な土地を有した中柏木は、近隣部落羨望の的で、土地所有の点からみれば爛熟期といえる時代で、山村からは必要以外の薪炭材の買却、原野からは家畜の飼料としての干草採取権利、柏の根っこの買却、手柴と、多くの利益を得ることはなかつ